

松阪市小学校外国語活動及び中学校外国語教育の推進について

【小学校外国語活動】

コミュニケーション能力の素地を養うことを目指して、3つの活動を大切に考えます。

(1) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる活動

- ・児童にとって身近な話題について、積極的にコミュニケーションを図る楽しさを体験する。
- ・積極的に外国語を聞いたり、話したりする。
- ・言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知る。

(2) 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める活動

- ・日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付く。
- ・異なる文化をもつ人々との交流体験等から、各国の文化等の理解を深める。
(活動例 あいさつ、数の数え方、食事、遊び等)

(3) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しみ、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付く活動

- ・外国語で歌ったりチャンツをしたりすることを通して、外国語特有のリズムやイントネーションを体得し、日本語と外国語との音声の違いに気付く。
- ・日本語にない音に触れたり、慣れ親しむことを通して、言語についての興味・関心を高める。

学級担任の先生が自信をもって取り組めることを目指します。

学級担任は児童の興味・関心をよく把握している。また、児童にとって身近な存在であり、外国語の使い手としての手本でもある。ねらいの達成や学級担任が教える利点を活かすために、次のようなことに配慮し、授業をマネジメントしていくことが大切である。

①学級に合った場面設定を考える

- ・児童にとって外国語を使ってコミュニケーションしたいと思う「場」を設定する。
- ・他の児童が知らなかったことや、外国について知らなかった事実気付くなど、児童にとって新しい発見のある活動を考える。
- ・国語科、音楽科、図画工作科などの他教科で、児童が学習したことを活用するなどの工夫をする。

②学級担任が外国語を使おうとするモデルとなる

- ・児童が聞いたことのある表現や身近な内容について、ALT に伝えている姿を見せる。
- ・ジェスチャーや表情などを加えて話す姿を見せる。

③クラスルーム・イングリッシュを積極的に使う

- ・簡単な言葉をリズムよく使うようにする。
- ・児童を誉める言葉を笑顔とともに積極的に使用するようし、児童が外国語を通じて、相手意識をもってコミュニケーションを図ることができるよう支援する。

児童につけたい力をつけるための授業づくりを目指します。

①児童が見通しをもって学習活動に取り組めるよう、児童と単元のゴールを共有する

単元の目標を明確にし、単元の終わりに何を指すのかが児童にわかるようにする。例えば、ゲームなどでは活動すること自体を目的とはせずに「1年生に学校紹介をするために、『表情やジェスチャー』などを加えて、相手に気持ちを伝える力を身につけることが目標である」といったように、児童と目標を共有する。単元を通したゴールを設定することで、毎時間の活動に目的意識を持たせ、活動に対して主体的、意欲的に取り組むことができる児童の姿が期待できる。

また、毎時間授業の最後に、その時間にどんなことをして何ができるようになったのか、わかったことは何か等を振り返ることで、児童は学習の過程で身につけた力を実感し、身につけた力を意識しながら、次の活動に主体的に取り組むことができる。

②学習形態を工夫する

外国語で抵抗なく話することができる児童もいれば、そうでない児童もいる。個人、ペア、グループ、クラス全体でといった風に、全ての児童が発話しやすい場面を意識的に作るようにすることが大切である。

③デモンストレーションをする

ALT 等とどのように活動を行えばよいのかの見本を示す。ALT 等がない場合は、児童の中から英語リーダー等を決めて活動の見本を見せることもできる。

④児童が理解できていないと感じたら日本語で話す

分からないまま進めていくと、児童は英語を積極的に聞こうとしなくなり、活動に主体的に取り組むことができなくなる。児童の様子をよく見ながら、理解ができていないと感じたときには日本語を加えて説明するなどし、全児童が何を活動するのかを理解した上で、授業を進めるようにする。

⑤繰り返し指導する

外国語活動では、児童は文字によらず記憶した表現を使って活動をしていく。児童が自信をもって表現できるようになるまで、歌やチャンツ、絵カード等を活用して、リズムよく繰り返すことを通して記憶させ、自信をもって活動できるようにする。

⑥伝えたい学習内容にする

決められた表現を暗記して使うだけでは、児童が自ら伝えたいと感じるようにはならない。今まで知らなかったことがわかったり、日本や外国の文化の新たな一面を発見するなど、児童が知ったり、伝えて意味があると感じられたりする場面を設定するようにする。

【中学校外国語教育】

コミュニケーション能力の基礎を養うことを目指して、3つの事柄を大切に考えます。

(1) 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める

- ・言語の仕組み、使われている言葉の意味や働きなどがわかるようになる。
- ・言語の背景にある文化に対する理解を深める。
- ・自分たちの言語や文化に対する理解も合わせて深める。

(2) 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ・実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行うとともに、音声、文字及び記号、語・連語及び慣用表現、文法事項について、理解したり練習したりする。
- ・具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えてコミュニケーションを図る。
- ・あいさつや自己紹介といった特有の表現が使われる場面、身近なくらしにかかわる場面、コミュニケーションを円滑にする場面、気持ちを伝える場面、情報を伝える場面、考えや意図を伝える場面、相手の行動を促す場面においての、言語の働きを理解する。

(3) 聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な言語力をバランスよく身に付ける

- ・初歩的な英語を聞いて、話し手の意向などを理解できる。
- ・初歩的な英語を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにする。
- ・英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できる。
- ・英語を書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができる。

4 技能を総合的に関連づけて指導することを目指します。

学習指導要領では、4技能を総合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する指導が求められている。複数の技能を関連づけ、実際のコミュニケーションの場面を想定し、「活用」を意識した活動を設定する。

総合的な活動を仕組む際には、ゴールに向けて各活動がつながっている必要がある。各学年や3学年間の到達目標に向けて、いつまでにどのような力を身につけておかなければならないか、年間指導計画の中で押さえていくことが大切である。また、1時間の授業においても同様に、つきたい力を明確にした上で活動を選び、手立てを考えていくことが大切である。到達目標に向けて、つながりのある活動でステップアップしながら力をつけていけるようにしたい。

①「読むこと」と「書くこと」を統合する

例えば、読んで得た情報をもとに、自分の考えなどと結びつけて発信する工夫をしたり、目的をもって読んだり、読んだ後に感想等を表現し合ったりする活動を設定したりするなど、教科書の本文の内容を理解させただけで終わってしまわないようにする。

②「話すこと」と「聞くこと」「読むこと」を統合する

例えば、スピーチや視聴覚教材などを聞いたり、手紙や読み物教材などを読んだり。ポスターや図表などを見たりしたことについて、問答したり、意見を述べ合ったりする活動を設定するなどして、スピーチ等を聞くだけの活動にならないようにする。

③スピーチなどを活用して4技能を指導する

(例) あるテーマに沿ったまとまりのある文章を書き、スピーチにつなげる。モデル文として ALT のスピーチ原稿を読み、書く意欲を高めたり、スピーチ後に ALT からスピーチ内容に対するコメントをもらい、その返答を考えるなど、ALT と連携して活動を進める。

④インタビュー活動などを活用して4技能を指導する

(例) インタビュー等で得た情報をもとに、単文で友だちの情報を書いたり伝えたりするだけでなく、情報からわかったことをまとめたり、自分の感想や意見などを加えたりして、まとまりのある文章を書いたり話したりする活動を仕組む。

他にも、さまざまな工夫で4技能を統合的に指導することができる。

小中連携を積極的に進めていきます。

小学校外国語活動では、外国語の音声や表現に慣れ親しむものの、スキルの習得・定着を求めている。一方、中学校では、コミュニケーション能力の基礎、すなわち、聞いたり話したり読んだり書いたりするスキルの習得・定着が求められる。

そこで、外国語活動で慣れ親しんだ外国語の音声や表現をうまく活用しながら、中学校では正確さ・適切さの指導を行うとともに、読んだり書いたりする4技能に係る統合的な言語活動を通して、より豊かなコミュニケーションを目指していくことが大切である。

小学校外国語活動での成果を中学校の外国語科に活かす、すなわち、子どもたちが「小学校でやったことが中学校でも役に立つ」と実感できるようにすることが大切であり、そのために小学校外国語活動と中学校の外国語教育をつなぐ必要がある。

小中連携については、児童生徒の実態を踏まえて段階的に進めていくと効果的である。

①情報交換をする

小学校・中学校の互いの取り組みを知り合う。例えば、中学校区の小学校教員と中学校外国語科教員とが外国語活動と中学校外国語科について、児童生徒の状況、学習内容、教材、指導アイデア等について情報交換を行う。

②交流をする

「小学校教員と生徒」「中学校教員と児童」「小・中の教員同士」「児童と生徒」の4つの交流の中から、学校や子どもたちの実態に応じて取り組みやすいものから始める。

最も効果的なのは、「児童と生徒」の交流である。その際は、必然的に小・中の教員の交流が必要となる。また、中学生には日頃の学習成果を披露する場となり、児童にとっては中学校英語へのあこがれをもつ機会となる。

③カリキュラムの連携

小中連携の要素（目標の一貫性、学習内容の系統性、指導法の継続性）のうち、指導法の継続性を図ることが現段階では最も重要である。小学校外国語活動で取り組んだ言語の使用場面や言語の働き(下記参照)を意識した「聞くこと」「話すこと」の言語活動を入れながら、聞いたり話したりする力（スキルの習得・定着）を育成していく。あわせて「読むこと」「書くこと」の4技能を統合的に活用した言語活動の取り組みを通して、コミュニケーション能力の基礎を養う。

※言語の使用場面・・・あいさつ、自己紹介、買い物、食事、道案内

言語の働き・・・・・・コミュニケーションを円滑にする、気持ちを伝える、
情報を伝える、相手の行動を促す

「CAN—DO リスト」の形で学習到達目標を設定し、主体的な学習を目指します。

「CAN—DO リスト」は、各学年、各学期、各単元、各授業では「外国語を使って実際に何ができるようになればいいのか」を生徒の目線までおろした具体的な目標である。設定することにより、教員と生徒が目標を共有することができ、生徒に主体的に学習する態度・姿勢を身につけることができるものである。

学校は、各校の「CAN—DO リスト」に基づいて、聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことの4技能を評価し、その結果により、生徒の定着度を的確に把握することができる。全中学校において、ALT を含め、外国語担当教員等で、生徒の実態を考慮しながら「言語を使ってどのような力を身につけるのか」を検討し、指導と評価の方法を共有していく必要がある。